

## ■ 講評

車いす使用者が抵抗なく円滑に電車に乗降できるようにするため、ホームに設置した床板装置の先端部分を持ち上げてスロープとして電車とホームの段差を解消し、装置内の床をせり出すことにより隙間を解消する装置を開発、実用化した。

安全面はもとより、コストや工期の観点から、ホームの土木スラブなどの大規模な改良を伴わないよう薄型のものとし、またメンテナンスも容易で価格を抑えるため基本構造をエア式にするなどの工夫を凝らしている。

京浜急行電鉄においては17駅49基を設置しているほか、相模鉄道、伊予鉄道、営団地下鉄、小田急電鉄が既に導入しており、今後も、沖縄都市モノレール、横浜高速鉄道などが導入を予定しているなど、波及効果も認められる。

現段階では、駅係員や乗務員の操作によって作動させているが、今後、利用客自身が操作できるよう検討中であり、将来性も期待できる。



利用風景